

---

# 恋文を燃やす

小笠原留守

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋文を燃やす

### 【Nコード】

N4081H

### 【作者名】

小笠原留守

### 【あらすじ】

僕は浴衣をおろした日に向かいの家に住む女性から奇妙な依頼を受ける。「恋文を燃やすところを写真におさめてほしいの」

窓の外では、彼女が恋文を燃やしていた。

「とても好きだった人なんです。」

近所のバーで知り合った女性。

意外にも同じ町内会、いや、それどころか向かいの家のかただった。

彼女が東京の大学進学の際に父親の転勤と会い重なって一家が東京に引っ越し、しかし就職で彼女がこちらに戻り、一軒家に一人暮らしだという。

そして今日、僕が浴衣をおろした日、彼女からの誘いだった。

「ねえ、今ちょうどいい時なの写真を撮ってくださいさらない」

「ええと、いいのですが、いま浴衣を着てまして……」

「かまわないわ、むしろそれでいらして。今、燃やしている今を写真に収めてほしいの。」

そして僕は、彼女と燃える恋文の写真を撮った。

彼女の家も僕の家同様、古い家屋だ。  
昭和の家、昭和ロマン。

彼女も家に似つかわしく、質素で品のある装いだった。

白いブラウスに、紺のスカート。

しかしなぜ、いったいぜんたいなぜ

僕は彼女が恋文を燃やしているところの写真を撮らねばならぬのだろつ。

20分ほどの撮影会。

恋文はすっかり灰になった。

僕は居間に案内され、彼女は紅茶をいれてくれた。

「一体全体、何のことだとお考えでしょう？」

彼女が切り出した。僕は紅茶をすすりながら、彼女を見た。

「ごめんなさい、あなたしか頼める人がいなかったの、わかるかしら。その、なにか儀式が必要だったの。それほど大切な人だったのよ。写真ができれば自分をしてみたいの、写真を燃やしている自分、それだけのことなのよ。あなたならわかってくれる気がするの、わかってくださるかしら。」

「ええ、たぶん。ある種の儀式が必要なのはわかります。でないとい…」

「手詰まり、先へ進めない」

「そうです。」

「私たち気が合いそうね。わかってたわ。」

「私こそあなたのような素敵な方に読んでいただいて光栄です。」

「かしこまらないで、あなたの方が年上なのよ。」

「そうでした、でも、礼儀の問題なんです。」

一週間後、彼女の家は再び空き家になった。

何でももうこの家自体を壊して更地にするらしい。

確かに、彼女一人で住むには広すぎた。

おそらく彼女はもっとこぎれいなマンションに引っ越したのだろう。

連絡先は知っていたが、特にこちらからきくことではない。

さらに二週間くらい経ってからだろうか、彼女からはがきが届いた。

新しい住所は幾分遠いところだったが、まだ市内だった。

はがきにはきれいな字でこう書いてあった。

「今度、お食事にも行きませんか」

おそらく彼女は自分の写真、あれほど見たがっていた恋文を燃やす自分の姿を見たに違いない。

そして何かが静かに動き始めたのだ。

そしてそれは僕にも波及している大きな波だった。

「はい、喜んで」

アジサイの挿絵の入った絵葉書に僕はありったけの力をこめて書いていない字を書いた。

あの恋文を燃やす儀式は僕のためでもあったのかもしれない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4081h/>

---

恋文を燃やす

2011年1月15日02時48分発行